



JAC GUNMA

公益社団法人

日本山岳会

群馬支部報

第24号

2025年
2月15日

新たな年に思う

公益社団法人日本山岳会 群馬支部長 根井 康雄

2024年も残りわずか。部屋の北側の窓からはいつものように赤城鍋割がこちらを向いてどっしりと座っているかのようです。背後にはちぎれた雪雲が流れる久しぶりの冬らしい年末の空が広がっています。そんな景色を時々眺めながら、年頭所感をしたためています。

2024年もいろいろなことがありました。5月の総会、6月には10周年記念式典、夏秋の合宿から四支部懇と木暮理太郎翁を偲ぶ会、晚餐会。そしてその合間には支部山行や自然観察会、安全登山の研修会など。一部の会員にオーバーワークを強いてしまった感も否めません。

群馬支部も設立10年余りで70人を超える会員を擁するまでに成長しました。外見的には中堅支部と言ってもよい規模です。しかしその骨格はどうでしょうか。昨年「骨太の支部へ」を掲げて、安全な山行のためのスキルアップ、知識と技術の習得。そして快適なクラブライフを目指し、バックヤードともなる会務の充実も目指してきました。しかしまだ

まだ道半ばまでにも至っていません。70人のさまざまな力を、そして経験と知識、人脈を、支部の活動に集約する事で、骨太の支部が形になっていくと思っています。

一人一人が、出来ることを少しずつでも良いので、力を寄せあいましょう。今は活動や事業の中核、会務の実践を一部の役員や有志の会員の尽力に頼っています。これからは今まで以上に委員会の活動に参加していただきたい。山行はもちろんですが、さまざまな支部の事業、活動に加わってほしい。それらのことを一人一人が少しずつでも意識して支部活動にコミットする事で、1年もすれば、「骨太の支部」という明確な未来が見えてくるはずです。

2025年は役員改選の年でもあります。人事は「人ごと」ではありません。支部運営の中核を託す役員の選出にも、一人一人が自分たちの大事なこととして関わっていただきたいと思います。今年が新たな飛躍の年になることを祈念して、年頭の所感とさせていただきます。

一瞬、薄いベールの向こうに元旦の太陽が姿を見せてくれた（赤城長七郎山、2025年元旦）



尾瀬合宿

福島支部とのあらたな交流の場に

日本山岳会において支部間の交流を図る場としては地域・全国の支部懇や晩餐会などがあるが、開催場所や時期的・費用的な問題などもあり、広く支部所属の会員が参加し、全国や地域の山岳会員と交流する場にはなりにくい点もある。そんなハードルをある程度乗り越えることができないかと、2023年8月には10周年記念山行を北海道支部の力強い協力の下、同支部との交流山行として実施した。これには10人以上が参加し、山行を通して遠隔支部間の交流を図ることができた。

そして24年10月には、尾瀬で県境を接する福島支部との交流を、長蔵小屋での尾瀬合宿を拡大する形で実施し、各支部から15人ほどが参加し、盛大に行うことができた。10月19日、各支部がそれぞれ2～4コースに分かれて尾瀬沼畔の長蔵小屋に集合し、夕食の後は平野顧問のお計らいで別館を会場に30人の大宴会となった。2日目は、燧ヶ岳や沼山峠コースを両支部がともに歩き、1年後の再会を誓いあった。



夕食を共にし、うちとけあう

大清水から一人尾瀬へ

今回の尾瀬合宿は集中登山で長蔵小屋にそれぞれ集まる事になっている。私が提案した一番シンプルな大清水から長蔵小屋コースには、同行者が無く私1人で歩くことになった。密かにホッとした。

時間があるのでシャトルバスには乗らず、ゆっくりと歩く。今年の紅葉はどうしたのだろう。風が来ると落ち葉がはらはらと舞うが、色付きは今一つだ。それに今日は暑い、上着を脱いでTシャツ一枚で歩く。



静かな一人の尾瀬沼湖畔

冬路沢を渡り、登りになると何人かが追い越していった。この辺りが紅葉の見ごろなのだろうが、曇り空のこともあり、やはり色付きは寂しい。三平峠付近から雨がぽつぽつと落ち始めたのでザックカバーを掛け、上着を着て傘を差す。

三平峠から尾瀬沼湖畔まで、こんなに遠かったかなと思いながら下る。朽ちかけた木道の一部が新しくなっていた。

湖畔に降りれば長蔵小屋までは高低差の少ない木道が続く。今日は別館が貸し切りとの事。夜は福島支部との合同大宴会が待っていた。

翌日の帰途も一人で歩き出す。尾瀬湖畔に出ると、小雪が舞って来た。向いから来た男性が「雪ですね」と言ってすれ違った。10月中旬、もう尾瀬は冬だ。

(中山 達也)

尾瀬・人模様に魅了

—福島支部と交流会—

尾瀬の紅葉はもちろん、予想もしなかった人間模様に魅了された。10月19日から21日までの3日間は、その一つ一つが感動の連続だった。沼山峠からの入山は初めてだった。峠に向かう車中からの原生林の美しさに言葉もなかった。峠を越えて霧が横切る沼に迎えられた。大江湿原から薄暮に近い長蔵小屋へ。歓迎の声をかけてくれたのは福島支部の方だった。群馬支部と福島支部の初めての交流会だったことは、実はこの時に知った。28人が集まった。振り



沼山峠から尾瀬沼へ



会津料理に舌鼓

返れば会員でなく参加したのは自分だけだった。

交流の実を挙げたのが夕食を終えての二次会だった。前の方も隣の方も積極的に声をかけてくれたのは福島支部だった。日ごろから接する機会のない福島の方々と、県境の尾瀬で意気投合するとは思ってもよらなかった。酔うほどに文字通り心が溶け合い、すっかり個人情報もお互いに披歴するように。特別の計らいで山小屋別館は夜更けまで開放することになっていた。が、午後2時に到着してから「山」と「酒」の比重を同じくしている福島の方には追いつかなかった。足をふらつかせながら二段ベッドの上に横たわった。

翌朝、出発する前にラインをつなげて交流の継続を約束した。山を通じて表現のできない心意気を感じ取ったのは初めてだった。

沼山峠から会津鉄道会津田島駅、只見線七日町で駅下車してのニシン料理の昼食、会津若松駅からふたたび只見線に乗り、只見では食べきれない豪華な会津料理と温泉。

翌日は只見駅からローカル線に乗り越後湯沢駅で酒風呂。常にお酒を共にしていた感動でした。またいつの日か。

(トレッキングサークルO 富澤 昇)

霧氷と紅葉の燧ヶ岳

10月19日(土) 福島県松枝岐村の御池からバスに乗車。沼山峠へ向かう間、車窓からの紅葉が素晴らしい。遠くに見える山なみは、優しいオレンジや黄色に染まり、おうとつが何とも言えず柔らかい。峠の登山口から木道を下る。雨予報だったせいか、土曜日というのに登山者は少なく、静寂の中、整備された木道を進む。コシアブラの透けるようなレモンイエローの葉に何度も目を奪われながら大江湿原へ到着。

初めての長蔵小屋別館は、壁や柱、窓の格子、照明など一つ一つが絵画のようだ。夕食は福島支部の方々と相席で話が盛り上がり、食事の手が進まず、一番最後になってしまうほど。その後、お酒を囲み交流会。一升瓶を3本背負ってきてくれた福島支部の皆さんには感謝しかない。楽しみにしていた福島の銘酒写楽をいただく。國権や会津娘と飲み比べ、酔いが回って更に話に花が咲く。

本命の燧ヶ岳は、朝からの小雨があがり、中腹以降は霧氷となっていた。シラビソやナナカマドの紅い実が白く包まれ、クリスマスのような。ミノブチ岳のえぐれた道を上り進め頂上俎唄へ到着するが、眼下はガスが立ち込めていて尾瀬沼は望めず。それでも、一瞬雲が切れた瞬間があり、登山者のワー！という歓声と其処にいる皆の歓喜の一体感は言葉にならない。

御池へと下る道は、岩が多く手こずるが、そこを抜けると、雄大な山々の紅葉の中に、霧氷の付いた樹々が見え、その荒々しいまでの自然美のなかへ木道が続いている。黄葉と白のコントラストは、今でも目に浮かぶ。

(中村由佳理)



燧ヶ岳の霧氷

ぐんま山フェスタ2024

ぐんま山フェスタ2024は10月26日（土）・27日（日）の2日間、高崎市間屋町のビエント高崎エクセルホールなどで開催された。主催はぐんま山フェスタ実行委員会（八木原聡明実行委員長）。群馬県山岳・スポーツクライミング連盟と群馬県勤労者山岳連盟、全国山の日協議会そして日本山岳会群馬支部が共催した。

群馬支部では日本山岳会関連の資料配布や「群馬の山歩きベストガイド」などの書籍販売のほか、太田市の木



暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会の協力による、日本山岳会第3代会長の本暮理太郎関連の資料展示を行った。

県内の山に関する紹介をメインに関連企業のブースやクライミング体験、登山道に関するトークイベントなど多彩な催しで、来場者の満足度も高かった。2日間の来場者はほぼ昨年並みの5500人だった。

登山道整備でトークセッション 「私たちにできること」は何か？

ぐんま山フェスタ2024（会場・ビエント高崎）の関連イベントとして10月27日、持続可能な登山道の整備や管理のあり方について考えるトークセッション「いま私たちにできること」が開催された。県自然環境課による前年に続いての企画。登山者が年々増加するなかで、登山道の荒廃は全国的な課題となっている。その維持管理は多くの場合、行政や有志によるボランティア活動などに委ねられているのが現状だ。そのコスト、労力の負担はいかにあるべきか、行政、保護団体など一部の管理者に任せたままでいいのか。尾瀬の「入域料」徴収などが議論となる中で、4人のパネリストが「私たちにできること」を熱心に語り合った。

パネリストは、尾瀬の歩荷、萩原雅人さん（Zoom参加）、赤城山トレイルランニング協会の酒井修さん（同）、六合村山岳会の木村正臣さん、谷川岳エコツーリズム推進協議会の中島あづささん（日本山岳会会員・群馬支部）。日本山岳会群馬支部の根井康雄支部長がコーディネーターを務めた。

萩原さんは歩荷の仕事のかたわら、尾瀬の現状をYouTubeで配信。「尾瀬の木道を修繕し、尾瀬国立公園の自然と登山者を守る」を合言葉に、仲間の歩荷や山小屋関係者、ハイカーらとともに「尾瀬の木道なおし隊」として木道修繕のための費用拠出をクラウドファンディングで全国に呼びかけ、2024年3月現在で1000万円を超える支援金を集めて県に寄贈するなどの活動を続けている。萩原さんは「この活動によって尾瀬の登山道整備に協力したいという大勢の人たちが全国各地にいることがわかった。こういった人たちを活動に引き込むための仕組みづくりが大切」と強調。「各



登山道の維持管理について意見交換したトークセッション

地で保護や整備に取り組む関係者が情報を密に交換し、どうしたら管理者の思いを多くの人に伝えられるか、ともに考えてやっていきたい。

尾瀬では未来が見えてきていると思う」と活動の手ごたえを語った。

中島さんは、年間4万人の登山者を受け入れてきた谷川岳の登山道や道標整備、トイレなどのさまざまな問題を一握りの人たちで抱えてきたこれまでの反省から、谷川岳全体をどうするかを考える場として行政、ガイドなど受け入れ側関係者による「谷川岳ミーティング」を定期的にスタートさせたことや、平標山の荒廃した登山道整備のため初めてボランティアを募り活動を行うことなどを報告。中島さんは「自助、公助、共助といわれるが、これまで公助のウエートが高く、これがないと日常の登山道の管理、草刈り、トイレ清掃、道標整備など何も進められなかった。しかし、登山者一人ひとりができる自助活動は非常に範囲が広い。まずきちんと登山道を歩く、ごみを持ち帰る、トイレの協力金を払う。このことだけでずいぶん違う。これからは自助、そしてみんなが情報共有しながら実践していく共助が重要」と訴えた。

野反湖登山案内センターなどでガイド活動や登山地図、白砂山などの登山道整備の実践活動を続けてきた木村さんは「登山者が一度でも歩く登山道に関心をもってもらうことが課題解決への大きな一歩ではないか」と強調。酒井さんは「赤城山でトレランの大会を開催する際に、山の仲間に入れてもらうための自分たちの責任はなにかと考え、トレラン参加費の一部を登山道の下刈りの費用に使った。今後も大会前に限らず、当事者として登山道整備をはじめ自分たちのできることを仲間たちと考え、実践していきたい」と語った。

会場の参加者からは「登山口や山小屋などに募金箱のようなものを設置して、多くの人に協力を呼び掛けたい」といった意見が出された。根井支部長は「登山を安全に楽しむには、登山道や道標などハード面の整備は欠かせない。登山者一人一人ができることを行うとともに、行政、団体、市民レベルの関係者が情報を共有し、効果的な実践と成果に結び付けられるような仕組みづくりが必要となるのではないかと」を総括した。トークセッションは群馬県の公式YouTubeチャンネル「tsulunos」で公開されている。

（萩原 哲）

秋の玉原で観察会

日本山岳会群馬支部は、2021年から年1回のペースで一般の参加者を集めて自然観察会を実施している。

2024年は沼田市にある玉原高原で自然観察会を行った。実施したのは10月13日(日)。3連休の中日で、果たして人が集まるのか心配していたが、定員20人のところ早々と21人から申し込みがあつてほっとした。当日はこのうち東京から申し込みがあつた2人が前日にキャンセル、結果的に県内から申し込みのあつた19人の方が参加した。募集告知は群馬支部のホームページと上毛新聞紙上の「ばれっと」で行った。

なお、今回は「利根沼田自然を愛する会」との共催事業として準備を整えてきた。当日講師をしてもらうことになっていた同会副会長の濱田誠さんと、9月に2回の下見を実施。解説のポイントやその内容を確認して当日に備えた。ちなみに利根沼田自然を愛する会は、昭和30年から玉原を中心に活動している歴史ある団体で、毎月第2日曜日を月例会と称



秋の玉原で自然を学ぶ

して玉原で観察会を精力的に実施している。当日も月例会に当たっていたが、無理を言つて1人お借りする形で実現の運びとなった。

さて、当日は雲一つない最高の観察会日和。湿度も低くからつとした標高1100

mの高原は爽やかな空気に包まれて気持ちのいいコンディションとなった。コースは中心広場駐車場をスタート。センターハウスでトイレを済ませた後、ブナ平、長沢三角点、湿原を巡り、中心広場駐車場に戻るといふ設定ですすめた。

ストレッチを行った後、2班に分け午前9時半にスタート。参加者は関東有数のブナ林を散策した後、湿原をまわって午後3時過ぎにスタート地点に戻った。予定時刻を30分ほどオーバーしてしまったが、参加者からは不満の声は出なかったのが救いだった。参加者からは「普段何気なく歩いている登山道でもいろいろな見方やポイントがあることを学べた。参加してよかった」など、うれしい感想が寄せられた。また、参加者を案内しながら出た話の中でスノーシューの話題になり、玉原でのスノーシュー観察会を支部のイベントとして一般参加者を募って実施するか検討することになった。

なお、今回の自然観察会には群馬支部から10人のメンバーがスタッフとして加わり参加者をサポートしてくれた。ご協力いただいたみなさん、ありがとうございました。

また、今回はファーストエイドのほかに、クマスプレーとハチスプレー、ポイズンリムーバーなどを複数用意して万が一に備えた(結果的に使わずに済んだ)。

お目当てのブナの黄葉には少し早かったが、湿原の草もみじはきれいだった。近年の温暖化が懸念される。

(自然保護委員長 木暮 幸弘)



山と鉄道同好会 第1回「山鉄旅」

小海線で行く飯盛山



「山と鉄道同好会」は鉄道好きの有志9人が集まって昨年春に群馬支部内に誕生した。10月の尾瀬合宿では有志による鉄旅として会津田島経由で長蔵小屋へ入り、翌日以降の只見線の旅を楽しんだが、同好会としての初山行が、この11月9日出発の1泊2日の小海線と中央線、八高線の鉄道旅。清里の名門施設「清泉寮」に泊まり、展望の飯盛山登山も盛り込んだ。群馬支部から4人、上川淵公民館の自主学習グループ「トレッキングサークル0」からも6人が参加して、総勢10人の賑やかで楽しい旅となった。清泉寮からは2人が加わり、翌日の飯盛山登山までは12人で行動した。

初日は朝の高崎駅からスタート。今は盲腸路線となってしまった信越本線で群馬側の終点の横川まで。横川駅と言えばかつてはアプト式、そしてその後は電車特急をELが引っ張り、押し上げた碓氷峠越えの拠点駅だが、今は軽井沢までの連絡バスの乗換駅。軽井沢では旧信越本線のしなの鉄道に乗り換えて小諸へ向かった。新幹線は早くて便利だがやはり味気ない。

小諸からいよいよ初日のハイライト小海線に乗り込む。佐久平を千曲川に沿って南下し、右手間近に八ヶ岳連峰を望むようになると野辺山駅、そしてその先の国鉄最高地点も近い。新雪の八ヶ岳を期待していたが、暖かな(暑い?)秋が続き、八ヶ岳はまだ冬の装いには変わっていなかった。しかし、晴天の下、山髯をあらわにしたそのりりしい姿には何度見ても心を打たれる。

野辺山を過ぎると間もなく清里。かつての駅前の



にぎわいは消え、寂しさも漂うが、今宵の宿「清泉寮」は広大な敷地に趣のあるロッジやコテージが並び、伝統と風格を感じさせる。そんな清泉寮の新館とコテージに分かれて宿泊したが、新館のバルコニーからは富士山が正面に望める贅沢なロケーション。コテージは森の中の落ち着いたデラックスコテージで、こちらは女性用に。

清泉寮から富士山を望む



2日目は奥秩父山塊の西端に位置する飯盛山への山行。八ヶ岳を西正面に仰ぎ、南アルプスから富士山などの大パノラマを期待していたのだが、朝からあいにくの霧模様。それでも雨に

降られることもなく、登頂を果たすことができた。下山後は小海線の残り区間を小淵沢まで。小淵沢では霧も晴れて、南アルプスも姿を見せてくれた。ここで少し時間をとって腹ごしらえやおみやげなどを調達して、中央線の上り特急「あずさ」に乗り込み八王子へ。八王子からが長かった。電化区間の終わる高麗川で乗り換え、関東の野武士の風貌の八高線のディーゼルカーに乗って高崎を目指した。



飯盛山を下山して記念撮影

登るだけが山ではない。眺める山、想う山も心に残る確かな思い出。そんな「心」を大切に山旅を年に1、2回、列車に揺られながら贅沢に楽しんでいこうというのがこの同好会。ぜひ皆さんの参加をお待ちしています。参加申込は根井まで。

(世話人 根井 康雄)

赤城学校登山について

国立赤城青少年交流の家のプログラムに「登山」があります。上毛三山のひとつである赤城山に登り、雄大な風景、山の動植物、仲間との協力、達成感など登山のもつダイナミックさや爽快感を味わうためのお手伝いを日本山岳会群馬支部は、学校登山の外部講師として協力しています。いつも明るい笑い声が絶えない



本年度の山行は、30回で、地蔵岳／長七郎山／覚満淵28回、黒檜山、鍋割山が各1回でした。コースのほとんどが新坂平登山口から頂上を目指し、小沼駐車場に下るルートで、東京、千葉、埼玉、茨城、群馬の各小中学生でした。1ルートに296人も入る学校もありました。毎回登山前のあいさつ時に、各生徒たちに聞いてみると約8割が山登り未経験者で、今後、登山愛好者になってくれるのかと思うと、責任重大でした。なお、大人の部では、各学校担任教員の下見山行、全国食肉学校、東京学芸大学国際交流・留学生センターなど、国際色豊かで華やかな、若者・男女が、赤城山の魅力に浸かり、これを世界に発信できたのではとも思っています。

ちなみに、下山後みなさんに感想を尋ねてみると、登山が楽しかった、素晴らしかった、と言う答えが8割を超えていました。なお、今シーズンは特に、天候に恵まれ、全山行雨具を着けることがありませんでした。これは、私が本来『天気の子』晴れ男のせいでしょうか。これからも『楽しい山登り：みらいの子らに』を目指していききたいと思います。

(荒木 輝夫)

木暮理太郎翁を偲ぶ会

11月3日、太田市寺井町の蛇川河畔にある日本山岳会3代会長・木暮理太郎生誕地の碑前で、恒例の「木暮理太郎翁を偲ぶ会」が開かれた。昨年までは地元で顕彰活動が続けている「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」が主催してきたが、今年から群馬支部も共催という形で加わり、支部長、事務局長他、地元県議でもある阿部知世会員らが参加した。

また、語り継ぐ会の会員のほか、日本山岳会本部から「引き継がれる山岳祭」プロジェクトの坂井広志プロジェクト・リーダー、木暮祭の地元でもある山梨支部の北原孝浩前支部長ら2人が、そして群馬

県山岳・スポーツクライミング連盟から吉田直人会長、日本山岳会員（栃木支部）で日本山岳・スポーツクライミング協会の仙石富英参与らも駆け付けた。

碑前祭の後は、近くの和風レストランに会場を移し、煮ほうとうを食べながら懇親を深めた。



NEWS [速報・短信]

キネシオテーピング講習会

11月16日、太田市勤労会館で、群馬支部安全研修委員会主催の講習会が開かれ、加藤博安全研修委員長ら専門のトレーナーによる指導を受けた。

ともすれば自己流に陥りやすいキネシオテーピングだが、今回はじっくりと時間をかけながら、部位ごとに実地でテーピングの基本を学ぶことができ、参加者は「山行前後などに役立てられる」と満足した表情で感想を語っていた。



関東四支部懇

毎年恒例の関東四支部懇が、11月23・24日、千葉県鴨川市の内浦県民の森で開かれ、4支部から35人が参加し、講演会や懇親、山行など充実した2日間を過ごした。

講演会の演題は「コンビニ登山の危うさを露呈したトムラウシ山大量遭難」。講師は日本山岳会の会報『山』の編集担当で、元トムラウシ山遭難事故調査特別委員会座長の節田重節氏。具体的なデータをもとにガイド登山における遭難事故に至る経過を詳細に説明し、一般登山者にも大きな教訓を与えてくれた。

2日目は2コースに分かれて房総半島の自然と歴史を学びながら、ハイキングを楽しんだ。群馬支部からは根井支部長ら6人が参加した。

古道調査・執筆の報告

日本山岳会創立120周年記念事業の山岳古道調査もいよいよ大詰め。全国120の古道のうち、群馬支部では中山道碓氷峠（入山峠などを含む）、越後への道（三国峠、清水峠など）、沼田会津街道、赤城山古道、榛名山古道を担当。

それぞれ担当を決め、調査、執筆にあたってきた。碓氷峠、赤城、榛名、越後への道などは一つの峠の中に数コースが含まれ、実質的には20古道ほどを担当したことになる。

原稿はすでに赤城を除いて出稿済みで、赤城もすでに最終確認をほぼ終え、まもなく出稿の予定。

出稿された原稿は本部プロジェクトチームでの編集を経て、日本山岳会が選ぶ「日本の山岳古道120選」として順次公開されていく。また昨年の熊野古道に続き、今年も山岳古道集中山行が行われる。場所は、大分県の国東半島にある国東半島峯道ロングトレイル。4月26日に両子山頂に集まり、半島東端のホテルで懇親会を開く。詳しくは日本山岳会ホームページで。

晩餐会

12月7日、日本山岳会の「年次晩餐会」が東京新宿の京王プラザホテルで開かれ、全国各地から319人が集まった。群馬支部からは5人が参加し、各支部の仲間たちと年に一度の懇親を深めた。

晩餐会に先駆けて開かれた記念講演会は天皇陛下がご臨席くださり、会員たちとともに興味深い講演を熱心にお聞きになられた。

講演は創立120周年記念事業の「グレート・ヒマラヤ・トラバース」の報告（重廣恒夫会員他）、秩父宮記念山岳賞受賞記念講演として「私のヒマラヤ山脈形成史の研究」（京都名誉教授・酒井治孝氏）と「甦った神の鳥雷鳥」（信州名誉教授・中村浩志氏）の2題、そして特別講演の「夜の山に抱かれて撮る山岳夜景」（山岳写真家・菊池哲男氏）の4テーマ。それぞれの分野を極めた聴きごたえのある話で時間の経つのも忘れるほど。

来年は創立120周年式典として、12月の第1土曜の6日に開催される予定。記念すべき晩餐会となるので、群馬支部からもより多くの会員の参加を呼びかけたい。

指導者養成講習会に参加して

9月21日、22日の2日間で行われた、登山教室指導者養成講習会に参加して、学んだことや再認識したことなどについて報告したい。

1日目の座学では、まず「リーダーのチーム運営と危機管理」と題して、登山リーダーの役割と様々な局面での危機管理の必要性について学んだ。登山ガイドとは異なり、登山リーダーには山行メンバーの安全確保義務は無いものの、メンバーの経験値や体調・体力等を良く把握し、メンバー同士の人間関係を調整しながら、安全で楽しい山行となるよう心掛けることが大事であると再認識した。

次に、「危急時の対応」として、事故を防止するためにすべき準備や行動中に行うべきこと、実際危急時となった際にすべき項目などについて学んだ。しかし、実際に危急時となった際に、果たしてどれだけの処置ができるか不安を感じる。やはり、様々なケースを想定したトレーニングを行い、技術向上を図るべきであると痛感した。

2日目の前半は、危急時対応技術の演習であった。ケーススタディ形式で、山行の計画段階や行動前、行動中等に問題発生した場合の対応をどうすべきか、フリートークで意見を出し合った。この方式は、様々な考えや意見が聴取でき、とても有効であった。

最後にロープワークと簡易ハーネス・ツェルトの利用方法の実習

であった。特にロープワークはすぐ忘れるので、サボらずに繰返し練習が必要であると反省した。

講習会に参加して良かったことは、山行に関する知識の再確認ができたこと、次に北は岩手、南は京都滋賀の各支部と繋がりができたことが挙げられる。今後の支部山行や個人山行の場で今回得たものを生かしていきたい。加えて、他の支部のように、もっと若いメンバーが講習会に積極的に参加されるよう切に望む。

(田村 和彦)



屋内での実地訓練

思い出の山

立山東面

原澤 修

山は、それぞれに異なる表情を持ち、そこで過ごした時間は私にとってかけがえのない宝物です。ある正月の豪雪の越後の山、冬の南アルプス縦走、夏の北海道中央高地の縦走。また、学生時代に合宿で挑んだ穂高岳や剣岳。そして何よりも、地元の谷川連峰で四季折々に登った数々のルート。それぞれが色濃い思い出を刻んでいます。

しかし、私の心に最も深く焼き付いているのは、大学山岳部1年生、19歳の夏に初めて参加した夏山合宿で訪れた立山東面です。現在ではほとんど人が足を踏み入れないこのエリアに、重いザックを背負って室堂の喧噪を抜け、内蔵助谷のゴルジュを下降し、左俣を登り返した先にあるテント場——そこで過ごした日々は今も鮮明に蘇ります。

昼間は内蔵助カールで雪上訓練や立山東面の岩場に挑み、夜は焚き火を囲んで語り合う。そこには、室堂周辺の賑わいからは想像もつかないほど

の静けさと、自然に包まれた贅沢な時間が流れていました。美しい後立山の夕照が今も目を閉じればありありと思い浮かびます。現在では自然保護の観点から、こうした場所にテントを張ることは難しいのかもしれませんが。



翌年から夏山合宿の拠点が剣沢に移ったため、あの場所を再び訪れることはありませんでした。そのため、時折ふと思い出しては、今どうなっているのか気になることがあります。

山はただの風景ではなく、そこに刻まれた汗や涙、仲間との絆、そして挑戦の記憶を私に語りかけます。これからも山々に登りながら、あの夏の日々を心の中でそっと反芻し続けていきたいと思っています。

事務局だより

【主な活動・事業・イベント】……………
〈2024年〉

- 上州武尊山スカイビュートレイル（9/22・23 上州武尊山）
- 支部例会（9/25 前橋市中央公民館）
- 支部役員会（10/16 Zoom）
- 支部安全研修委員会（10/17 Zoom）
- 尾瀬合宿（福島支部と合同）（10/19・20 尾瀬・長蔵小屋ほか）
- ぐんま山フェスタ2024（10/26・27 高崎市・ビエント高崎）
- 木暮理太郎翁を偲ぶ会（11/3 太田市寺井町）
- 山と鉄道同好会第1回「山鉄旅」（11/9・10 清里（小海線～中央本線））
- キネシオテープ講習会（11/16 太田市勤労会館）
- 登山道整備PJ現地視察（11/19 渋川市・水沢山）
- 支部例会（11/21 前橋市中央公民館）
- 関東四支部懇談会（11/23・24 千葉県・鴨川市）
- 支部報編集会議（12/6 前橋市中央公民館）
- 日本山岳会年次晩餐会（12/7 東京・京王プラザホテル）

■安全研修委員会（12/17 Zoom）

■支部役員会（12/18 Zoom）

■支部山行（ラッセル訓練）（12/26 谷川連峰・白毛門）

〈2025年〉

■支部山行（初日の出）（1/1 赤城・長七郎山）

■支部新年例会（1/15 高崎・メトロポリタン高崎）

■山行委員会（1/16 Zoom）

【今後の主な予定】……………

■支部山行（2/2 高峰高原・水の塔山）

■冬の自然観察会（2/11 武尊西麓・玉原高原）

■支部役員会（2/19 Zoom）

■安全研修委員会（2/20 Zoom）

■山行委員会（3/17 Zoom）

■支部例会（3/19 未定）

日本山岳会群馬支部報 第24号 2025年2月15日

発行：公益社団法人 日本山岳会群馬支部

〒371-0051 前橋市上細井町1200-7（根井方）

<https://shibu.jac1.or.jp/gunma/>

編集者：総務委員会広報グループ支部報担当

発行者：根井 康雄 印刷：上武印刷株式会社